

高校スポーツにおけるリーグ戦の導入過程

ケーススタディー：埼玉県高校サッカー

トップスポーツマネジメントコース

5016A301-0 岩崎賢太郎

研究指導員 平田 竹男 教授

1. 背景

日本バスケットボール協会は、2015 年「JAPAN 2024 TASKFORCE」の抜本的な改革を経て、育成年代の強化策として高校年代のリーグ方式の導入を示した。筆者は、高校の教員として育成年代のバスケットボールの指導に携わるなかで、育成年代にこそ試合の機会を増やす必要性を実感している。

日本の高校スポーツで長期リーグ方式が導入されている競技は高校サッカーのみである。長澤（1998）はトーナメント方式における次の競争の場を失うことについて、三橋（2003）は競技力向上には試合を多く経験することが不可欠と述べている。多くの試合経験を積むことや、能力に合わせたゲームでの成長という視点で考えるとリーグ方式は育成年代に適した競技方式と考えられる。

高校サッカーでは2011年創設のU-18プレミアリーグにより、全国から都道府県、支部までのピラミッド型の重層リーグ展開を実現した。これまで、既存のトーナメント大会に並行してリーグ大会を導入した際に都道府県レベルでの競技運営上の課題実例とその解決を体系的に示したものはない。本研究では、全国リーグ展開までの経緯として、各都道府県リーグ創設を埼玉県の事例からたどった。

2. 研究目的

本研究は、高校スポーツにおいて既存トーナメント方式を持つ年間スケジュールに長期リーグ方式を導入することで生じる課題をどのように解決したかを明らかにする。

3. 研究方法

高校サッカーリーグ化への導入段階から現在に至る

までの障壁とその対応策を明らかにするために、埼玉県高校サッカーリーグの導入を対象とした。創設案に関わった当時の埼玉県高体連サッカー専門部委員長、現職の委員長及び技術・審判・コーチングに関わる関係者への半構造化インタビューを実施した。次に、リーグ創設関係資料、創設時から現在に至る大会要項、大会記録等の文献調査によりリーグ化の経緯、試合数増加による会場確保、審判確保、競技スケジュール、顧問負担などについて比較検討した。分析に際しては「実例に基づいた視点」に特に注目して進めた。

4. 結果

埼玉県高校サッカーリーグ戦はU-16、U-17、U-18と段階を経て導入が実現した事がわかった。その背景にはJFAのキャプテンズミッション（2002年10月）によるリーグ戦促進の影響があり、それに対応した埼玉FAと高体連のスピード感ある連携があった。試合数の増加により起こる(1)から(4)の障壁と対策が明らかになった。

(1) 試合数増加に伴う会場の確保と運営

年間試合日数がリーグ化前（2002年）は25日だったのに対して、リーグ化後の現在（2016年）は61日と増加した。会場の確保については、既存の大会の間に実施していた練習試合等の会場確保と同等に学校会場での実施を基本としたため大きな問題無く実施できた。

(2) 試合数増加に伴う審判の実態

年間試合数が、リーグ化前（2002年）149試合に対してリーグ化後（2016年）は430試合と増加した。これに対し、審判割当は、既存の大会では試合ごとに「個人」を割当てていたが、リーグでは試合ごとに「チーム」を割当、担当チームが責任を持って審判を手配

する方式とした。また、4 級以上のライセンス所持を条件とし、審判には 3000 円の手当てを準備した。アシスタントレフリーにはユースレフリーを活用した。

(3) 試合数増加に伴う競技スケジュールの実態

試合日数が増加したことにより既存のトーナメント大会と時期が密接し、年間の競技スケジュールが過密化した。また、3 月を除く全ての月に試合が組まれ、学校行事や定期考査等との調整が困難となっていることがわかった。対策として、FA レベルでは上位リーグ参戦チームへトーナメントのシード権を与え試合数を調整した。JFA レベルでは国体の U-16 化を推進しトップ選手の試合数を削減した。

(4) 引率教員の年間引率日数増加と複数顧問の必要性

試合数、試合日数が共に増加したことにより顧問の年間引率日数が増加した。また、U-18 リーグでは、各チーム複数エントリーが可能であった。さらに、任意参加の U-16 リーグへのエントリーも可能であり、1 チームを最大 3 分割して大会参加するためには複数顧問の必要性が生じた。対策として、各学校での顧問配置の配慮をよびかけ、地道に顧問数を増やしていた。

5. 考察

① 試合数増加と審判

試合数増加による審判確保への対応から、ユースレフリーを育てる機会が生まれた。これは、早期から上級審判を目指すきっかけとなり、逆台形モデルの広がりサッカー界全体の発展へと繋がると考えられる。

② リーグスケジュールと学校事情

長期リーグ導入により、高校選手権後のリーグ戦実施と、3 年生の引退時期の課題があり①リーグ期間、②トータルの試合数、③既存のトーナメント大会との日程調整と、「育成年代の選手に長くサッカーをプレーさせたい」という JFA の方針を併せてスケジュールを再考していく必要がある。

③ 実態に応じたリーグ構成

埼玉は、2 部制県リーグの下に支部リーグが東西南北 4 つに分かれる。各支部トップは県リーグへ自動昇格し同数が自動降格する入替え競争の激しいリーグとなる。これは、埼玉の一例であるが、都道府県の実態

に応じたリーグ構成を成り立たせる JFA の柔軟な対応が、全国リーグ化の成功要因の一つと考えられる。

④ 重層リーグ構造から生まれる逆台形モデル

重層リーグへの複数チームエントリーにより、多くの選手が当事者（出場選手）として競技との関わり（試合に出場する）を持ち、将来的にその競技に携わる人を増やすことで逆台形モデルを形成し、競技の発展につながると考えられる。（図 1）これは、トーナメントが主流の日本に根付く補欠文化を、普及へとつなげていく画期的な方法でもあると考えられる。さらに、U-16 リーグの設置により中学 3 年時から高校 1 年時の試合に出場するまでのブランクを埋めており、普及・強化に効果的な影響を及ぼしていると考えられる。

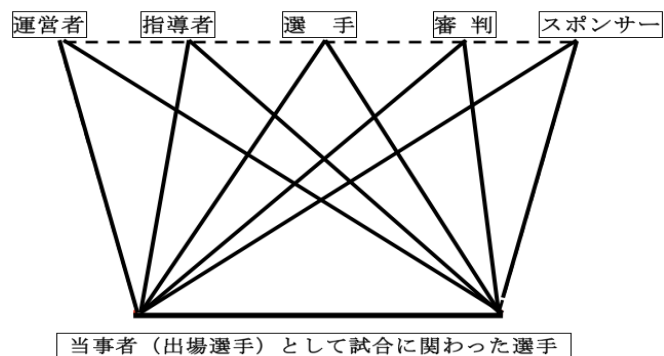


図 1 重層リーグ構造から生まれる逆台形モデル

⑤ JFA と FA の関係性とプレイヤーズファーストリーグ文化を作り上げてきた背景には、JFA の理念と、それを理解し共通認識のもと進んできた各 FA の関係性があげられる。特に、現場レベルから運営レベルまで「プレイヤーズファースト」が浸透している現状が、トップ選手から控え選手まで「強化・普及・育成」を実現し、育成年代の競技力向上へと繋がっていると考えられる。

6. 結論

本研究により、トーナメント方式を既に持つ年間スケジュールに長期リーグ方式を導入するためには、試合数増による審判の確保への対応策、学校スケジュールとの調整、引率教員増の課題をクリアしていく事で実現可能ということが明らかになった。さらに、JFA の明確なビジョンと、FA の「何のためにリーグを導入するのか」という目的を一致させ取り組んでいく事が欠かせない必要事項である。